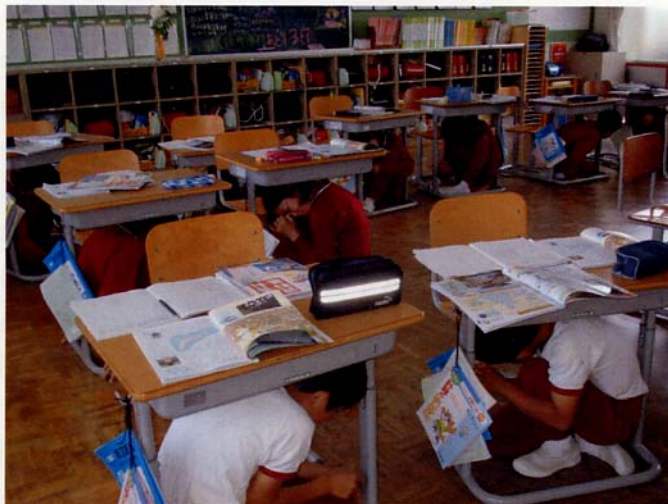


防災教育チャレンジプラン資料

I LOVE 廿枝

～ 私たちの手で守る ～



徳島県阿南市立新野東小学校

1 はじめに

防災教育チャレンジプランの指定を受け、6年生で地震を想定した防災教育について考える学習に取り組んだ。わたしたちのテーマ「I Love 廿枝」では、自分たちの住んでいる町の一員として、もし地震が起きたとき自分たちの手で何かできることはないか、を考えていこうと総合的な学習の時間に取り組んだ。幸いなことにわたしたちは今までに大きな地震に遭遇していない。子どもたちが住む新野町では地震が起きても津波を受けることはない。しかし、近年起こるであろう南海地震が発生したときは、火災における災害が起きると推測される。決して起きてほしくない災害であるが、もし起きたときに自分たちにできることをしていかなければ、じつと行政や消防などの諸機関の援助や支援を待つだけではどうにもならない。そのためにも今の学習が万一の時に少しでも役立つことになるようにしていきたいと考え取り組んだ。

2 研究の目的

- (1) 必ず起こるといわれている南海地震に対しての関心をもつ。
 - (2) 自分たちが地域の一員として災害時にできることを考える。
- 子どもたちにつける防災力として、この2点を研究の目的とした。

3 研究の方法

- (1) 体験して学習したことをもとに、地震避難訓練一泊シミュレーションを行う。
- (2) 学んだことをもとに、新聞作りや模造紙などによってまとめたり、地域に発信する。

4 研究の内容（活動実践）

- (1) 「廿枝は安全か！」 ～どうかな？わが家の安全は？～

①私の寝室マップ

生活のいちばん身近な場所として、自分が寝ている寝室を見直した。なぜなら地震はいつどこで起きるか分からないにしても、睡眠中は地震が発生したときにとっさに対応ができない状況にあるからである。大きな揺れが起きたとき、寝室内でどのようなことが起きるかをしっかりと考えていくことは、自らの命を守るためには大変重要なことである。

現在の寝室マップを作り、そこから予想される部屋の危険なところをチェックすることは、寝室の点検だけでなく、自分が生活しているいろいろな場所の安全性を考えるきっかけとなっていく。常に地震が起きることを想定した生活をしながらも、実際はその対応策を考えて改善しているわけでもないのが現状である。だからこそ寝室マップをつくる意味がある。そのマップをもとにして家庭での話し合いの場を設定することは、大切な家族との絆を深めることにつながった。



そして、現在の寝室マップと出来上がったリフォームマップと比較することは、今後の安全対策を考える効果的なきっかけとなった。感想の一部から、棚などの上にのせてあるものを少しでも整理したり、ストッパーでタンスと天井をつなぐなど固定して動かないようにするなど、ものの配置の工夫によって寝ている自分への被害を最小限に押さえることが考えられるようになった。

すでに地震対策に取り組んでいる家庭も案外多く、子ども自身も意識が芽生えてきている。

②徳島県立防災センター見学

今までに震度1程度の地震の揺れは何度か体験している。それでも突然に起きると驚いて右往左往してしまうのが現状である。そこで少しでも模擬体験することで、実際に本当に地震が起きたらどのくらいの揺れが起こるのか、地震の恐怖を知るために徳島県立防災センターを見学した。



災害にはいろいろなケースが考えられ、地震体験だけでなく消火体験、風雨体験、通報体験、煙体験、救命体験など災害時に被害を最小限に食い止めるために自分にできることか何かを考えさせられる場となった。例えば、消火体験では、地震が発生したら次には火災が起きる可能性は高い。家庭や学校内には消火器を設置はしているものの実際に手にとって使ったことはない。たとえ使い方を知ったとしても災害時に子どもが消火活動に関わることはまずないことである。しかし、今は無理でも大人

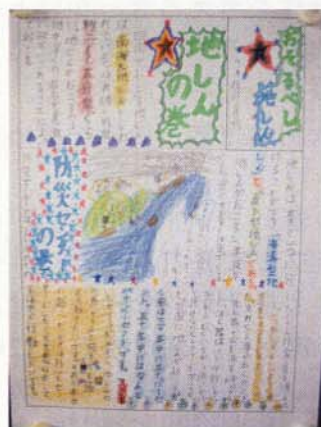
になったとき使うことがあれば効果があつたと考えられる。消火器での消火活動だけでなく、消火器に代わる方法を考えることができれば災害への対応ができることにつながる。

③地域の防災マップ

災害が起こる前に避難場所や危険箇所、施設を調べておくことはこれから大変重要になってくる。子どもたちの生活の場所でも何気なく見過ごしている場所がある。地域を知ること、発生時の対応の仕方が迅速なものへと変わってくる。わずかな時間のずれでたった一つの尊い命の運命が左右されることは過去の事例でも顕著に表れている。

そこで各自が地域を回りオリジナルマップを作った。これは自分の目で見て確かめることでその場所の安全性を点検することができる。また調べたそれぞれのマップを照らし合わせることで、共通な場所の再確認ができたり、見方の違いを再発見することにつながる。そしてこの2つを生かした1つのマップが出来上がる。このマップを地域への発信の活動にもつなげたい。

④地震新聞



防災センターでの体験と本やインターネットで地震について調べて新聞づくりをした。体験したことと調べることで地震とは何か、について自分の考えをまとめることができた。地震の大きさ、全国の災害状況、地震時の対応の仕方など調べることで、少しではあるが関心を高められた。ひとつとしか思っていなかった出来事が自分たちの身近でも起こる問題として真摯に受けとめるきっかけづくりとなった。

さらに地震避難一泊シミュレーションの新聞づくりでは、一泊二日の活動を振り返って体験を通して感じたことや体育館での避難生活の厳しさから学んだことを表した。そして、今後の生活のあり方につながる新聞となった。

(2)「非常時には何を！」

～非常持ち出しグッズには？わたしたちにもできるごはんづくりとは？～

⑤地震避難一泊シミュレーション

10月20日、午後4時過ぎ、防災ずきんに、自分が必要とするものを非常持ち出し袋に



詰め込んだ子どもたちが避難場所である小学校に集まってきた。

—地震避難一泊シミュレーション—

10月20日午後、震度6の地震が発生したと想定。避難命令が出され、午後4時過ぎ避難場所である新野東小学校体育館に避難する。・・・現状はひきつづき微震続き、電気、水道も遮断された状況で復帰のメドもついていない。とりあえず、一晩学校で避難し、回復を待つ。

当然初めての体験で、子どもたちは楽しみ半分という感じであった。事前に保護者には文書での協力を得てはいたが、子どもたちよりも保護者の方が熱心に非常持ち出し袋の中味を考えたり、寒い体育館での素泊まり状態にかなりの心配をされていたことを後日聞くこととなった。また、「炊き出しに協力しましょうか。」という連絡もいただいた。保護者にもかなりの関心を持っていたことはこの一泊シミュレーションの結果によらず、被災を受けたときには地域の協力体制ができるということに結びつく。担任の無鉄砲な計画に、内心は戸惑いや不安を抱えていたことも明らかではあるが、まずは子どもたちだけの力で何ができるかを試すために支援を最小限にさせていただいた。

そんなこんなで始まった避難シミュレーションだが、「家からずっとこの格好だったので恥ずかしかった。」「会う人に笑われた。」などで始まった。だがこの格好をくずさなかった子どもたちのすばらしいことは、事前に学んだ地震災害時の様子を十分に認識して行動を行ったところである。一見奇妙な姿に驚く地域の方もいたらしいが、シミュレーション通りに進行された。そして、いよいよ避難後、かまどづくり班と竹の切り出し班に分かれて活動が始まった。



【かまどづくり】

生きるためには食いつなぐ準備をしていくことが重要である。かまどづくり班は、校内を探しブロックや不要になった材料を集め、自分たちで工夫したかまどを短時間で作り上げた。子どもたちの予想していなかった出来上がりのかまどに感心させられたが、以前やきいもをした経験などを生かし、そこらにあるものを効率よく利用し、対応していくという力がついていたことは大きなことだった。災害時には十分ものが備わっていることは決してない。だからこそ自分たちで考えて行動していく力が要求されてくる。

特に四方八方を山に囲まれたこの地域では、災害時に行政などの支援が迅速に届くことはないと考えられる。まして、もし山崩れなどの崩壊が起きたときには交通網が遮断される可能性が予想される。その中では、家庭や地域にあるものを有効に利用して食糧の補給などをしなければならないことも十分に考えられる。

【竹の切り出しと竹の飯ごうづくり】

地域の特産は竹である。最近はタケノコを掘って生計を立てていく家庭はほとんどない状況になっている。竹の根は強く張りめぐらしていくために、竹林は崩壊しにくく、災害時には十分にこの竹を使って一時しのぎをすることができると予想される。

竹の切り出しは、今までに経験がない子どもたちにとって貴重な体験となった。近所のおじいさんをお願いをして一緒に藪に入った。薄暗い藪の中では一本の竹を切るのさえに随分と長く感じられた。のこぎりの使い方もままならない子どもたちにとって、並大抵のことではなく、呆れたおじいさんの手を借りることになった。竹を倒す方向の決め方やのこぎりの引き方などを見ているだけで随分子どもの脳裏に残る活動となった。



当初の計画では3本の竹を切り出す予定であったが、切り倒した竹は思った以上に太くて長く、実際に被災状況の中ではこの1本の竹を切り出していくことさえも大変なことであることを実感することになった。そのままでは数を下りることはできず、竹の節目を有効に使っての飯ごうをつくるために小分けしていくことにした。一人一人がこの後この竹が貴重な材料となることを認識させられた瞬間でもあった。



帰りを待っていた子どもたちから歓喜の声も流れるほどの感激で、学校に持ち帰った竹ですぐさま協力して飯ごう作りに取りかかった。暗闇の中、竹を切る者、しっかりと押さえる者、懐中電灯で明かりをとる者と、それぞれが自然と役割を分担していった。それぞれの役割を決めなくても助け合って取りかかったことにも大きな意味がある。

被災時には身体的にも精神的にも気分が重くなっている時である。その中では、進んで自分がしなければならないことを見つけて動くことが大変重要と考えるからである。

細かく切った竹であったが、次にその竹の中にお米を入れる方法を考えなければならなかった。事前の予定ではきれいに竹の上の一部分をふたに切り抜く予定にしていたが、暗闇の現状ではそんな余裕はなかった。そこで、子どもたちは3分の1ぐらいのあたりから割ることで、入れる部分とふたの部分に分けることを考えた。なたを竹に差し込み、もう一つのなたの背面を使い、たたいて割っていったが、竹が固くて思うように割れずに苦労した。すべてに体力のいることではあったが、苦労している中にもだんだんと楽しさも増してきた。この活動も互いに協力していることで、何かをやり遂げようとする一人一人の気持ちが一つになっていったからこそできる活動であった。しかし、内心は本当にこの竹でご飯が炊けるのかという不安は少なからず残っていたはずである。



【お湯沸かしと夜の食事】

出来上がったかまどは完璧なものであり、お鍋がきれいに乗せられるコンロのようなものであった。水はポリタンク40リットルと限られており、これで二日間まかなうことになっていた。真っ暗の中で、竹の飯ごうづくりと同時に進行でお湯を沸かす作業が始まっていた。今晚はカップうどんを夜のしのぐという設定であったために、お湯さえ沸かせれば夕食にはたどり着く予定だった。



子どもの中には、非常持ち出し袋にマッチやライターを持っていた子どもがいたが、火を

起こすことが大きな課題であった。何度も試みるがなかなか燃えつかず、うちわで仰ぐなどの苦心を重ねた。理科の学習で空気の通り道を既習していたが、実際は燃えつかない焦りもあり空気の通り道がないほどの木がかまどの中に押し込められていたりもした。火の加減も難しくついては消えの状態や火の強弱は考える余裕さえもなかった。また、最近マッチを使う機会もめっきりと減っているのが現状であり、生きる力に結びつく体験をする必要性を感じる事となった。



そして普段は家族団らんのはずの時間に、やっとたどりついた安堵感で、みんなでカップうどんを食べた。「いつもと違ううどんの味がする。」「本当に食べられるか不安だった。」の言葉の裏には、災害が起きたときには食べられるかどうか分からないということを痛感した思いだった。もったいなくて、おつゆをすべて飲みきる子どもがいた。後日聞いた話では、「カップうどん1つで空腹だった。」と、話す子どもが

たくさんいた。決して空腹を口にせず我慢をしたところにも、災害時の食べ物に対する意識の持ち方を考えさせられた。

食べ終わった割り箸は翌日の火起こしに使い、容器はご飯を入れるためにと各自が大切に保管しようと考えた。割り箸を火起こしに使ったことは、それがよかったかどうか疑問符が残るところではあるが、使える物はうまく再利用していこうと考えていった。また、市民安全局からかんぱんを配給していただき、一人一缶ずつ配ったが、もし朝ご飯が食べられなかったらその時にと非常食には手をつけなかった子どもが多かった。贅沢な食生活をしている私たちにとっては、食べ物のありがたさと簡単に物を捨ててはならないことを教えられた。時間的にはわずか3時間という間にも、生きていくことの大切さを知った。

また、一緒に活動してくださった保護者の励ましが、疲れている子どもたちに満足感を与えてくれたようであった。そしてこんな時こそ、笑顔とコミュニケーションはお互いの心を和らげるもとになることを暗闇の中で感じた。

【阿南消防組合 平岡裕文さんのお話】

シミュレーション活動を一時中断して、阿南消防組合の平岡さんを招き、防災についてのお話を聞いた。地震の恐ろしさや過去の地震の事例から、必ず起こるといわれている南海地震が起きたときの心構えを学んだ。そして、「自分の命は自分で守る」という言葉の中に、災害時には誰かの助けを期待して待つてはならない、消防や行政も身動きが取れない状態になっているんだという厳しさを切実に感じるお話をしていただいた。また、子どもたちの質問にも答えていただき、和やかな中にも地震に対する意識を高める貴重な時間になった。

そして大変ありがたかったことは、保護者のほとんどがこの講演に参加して、子どもたちと一緒に地震について考えてくれたことであった。後日、保護者からいただいた感想にも、地震について真摯に受けとめた意見が聞かれた。

(保護者の感想)

南海地震がおいても、ほんとにどうしようもなくて、私達も平岡さんの話を聞いて、自分の考えの甘さを痛感しました。人によるので、自分の命は自分で守り、とにかく生き抜いていかなければいけないと強く思いました。私、子どもは、今回の体験を通して、自分で考え行動することの大切を学んだと思います。南海地震が本当におきたとき、きっと今回の体験を生かして、生き残るものと信じています。親子で貴重な体験をさせていただけました。

〈非常持ち出し袋の中味〉

	人 数	それなりの用途
懐中電灯	18人	暗闇を照らしたり、居場所を伝えるため
携帯用救急セット	14人	応急処置をするため
非常食(かんぱん・クッキー・あめなど)	7人	空腹になったとき少しの時間でももたすため
水	17人	のどの渇きをいやす。水だけでも人間は生きられるから
着替え	4人	防寒やけがを防ぐなどのため
タオル	17人	いろいろな使い方ができるため
ティッシュ	17人	拭く、包むなど
めれティッシュ	4人	けがの消毒や汚れをとるため
軍手	15人	作業をしたり、けがを防ぐなど
ハンカチ	13人	拭く、巻くなどの用途がある
包帯	5人	応急手当だけでなく、ひもとしての役割も果たす
カイロ	3人	防寒のため
ラジオ	9人	災害情報をつかむため
ガムテープ	1人	通常の利用だけでなく、貼って家族に伝言を書くなどの連絡に使う
新聞紙	4人	包んだり、敷いたり、拭いたり多様な面がある
ろうそく	2人	電気が止まったときの代わり
ライター・マッチ	5人	火を起こすため
10円玉	6人	もし公衆電話が使えるなら家族に伝言(177)を残すから
貯金通帳	1人	事後のため
時計	2人	時間の確認のため
サランラップ	1人	保護したり、容器の中に敷いてそのまま捨てられる。
ガーゼ	3人	消毒や拭きとるため
防犯ベル	3人	建物の下敷きになったりしたら居場所を知らせるため
歯ブラシ	2人	
ナイフ	2人	
つめきり	1人	
ロープ	1人	縛ったり、人を助けるときの利用
らんたん	1人	懐中電灯では明かりが少ないため
着火剤	1人	簡単に火を起こすため
ポケットコート	1人	風雨対策や防寒として
寝袋	2人	体全体をおおっていただけるから

【体育館での夜一泊】

シミュレーション話では、毛布と防寒シートを支給されるとして、今回は各自が用意をした。今までに宿泊施設での泊まりは経験があっても体育館での泊まりは初めてのことである。子どもたちは3組に分かれて、体育館の壁ぎわに寝床を選んだ。たくさんの人が避難した場合はどうなるのだろうか考えるきっかけとなった。体育館の真ん中では、どうしても周りを気にしながらの生活を送らなければならない。被災で精神的に疲労困憊しているとき、さらに気を遣うことは全体の雰囲気悪い方向に導くことになる。そして、精神的に余裕のない時期にはどうしても弱い立場の人がこの場所に追いやられることが多いと考えられる。では、どうして子どもたちは壁ぎわを選んだのだろうか。普段の体育館では、子どもたちは真ん中に集まることが多いが、疲れたときには隅を選び、壁ぎわにもたれかかることをよく目にする。もたれかかる場所や人とのつながりを遮断できる場が一カ所でもあれば落ち着くこ

とができると考えられる。避難時の状況はまさにこの通りではないだろうか。今後、災害時に起こるであろうこの弱者の問題については、一人一人が考えていかなければ共生していくことは難しい課題となった。



次に、体育館での過ごし方の工夫であるが、広い体育館であり、特に夜にはひんやりとした寒さを感じる。寒さ対策として、カーテンを閉めきるだけでなく、子どもたちはマットを敷き布団代わりに持ち出した。その上に防寒シートを重ね合わせ床からの冷たさを防ぐ対策である。そして、持っている上着を重ね着したり、毛布にくるまったりして、できるだけ寄り添って寝ることで寒さを防ごうとしていた。

多くの子どもが各自で懐中電灯を用意していた。電池式の懐中電灯では長時間利用できないので、充電式の懐中電灯を選んでいった。懐中電灯の必要性は十分に分かっているが、家庭でもどのようなものを非常用に用意していけばよいかを話し合っている結果であったと考えられる。また懐中電灯一つを取り上げても、実際揺れが続き家具など物が散乱したときには、一つの懐中電灯だけでは足りなく、家のいろいろな場所に置いておく必要もある。

さらに、携帯用の寝袋を家族一人一人が持っていたり、段ボールを敷くことで寒さを防ぐ方法なども考えられていた。本来は出口を1つにしたり、外気をさえぎるためにガムテープなどで隙間をなくす工夫もできればと考えられた。

興奮のあまりに眠られない子どもも多く、真っ暗の中で何度となく懐中電灯をつけてトイレに行く子どもがいた。静まりかえった体育館ではほんの小さな物音でも響き渡るほどで、だんだんと時間が過ぎていくほど寒さを身にしみて感じるようになってきていた。やはり避難場所での生活というのは厳しいということを実感させられた。

【竹のご飯炊きと朝ご飯】

今回のシミュレーションの目的の1つである竹を使ってのご飯炊きである。前日に作った竹の飯ごうで本当に米が炊けるかどうかであった。心配になって朝早くから保護者も何人か集まってきてくださった。

2升の米をとぎ、竹の中に入れる作業と火起こしの2つに分かれて活動が始まった。米をとぐ子どもたちは、できるだけ水を無駄に使わないよう少量の水で何度も繰り返し米をといだ。家庭科の調理実習で米と水の配分は分かっているものの、竹の底が湾曲になっているために全く見当がつかない状況であった。そこで、水を見た目よりも多めに入れることにした。

一方、かまどの班では前夜に鍋で沸かした方法とは別に、炊いているうちに竹がひっくり返らないように間に石をはさみ固定できるような工夫もした。また、昨夜はなかなかできなかった空気の通り道をつくるたき木の工夫もできた。

いよいよ竹の飯ごうをかまどに寄せ、炊く準備ができた。前夜にはあまりの必死で気づかなかったが、非常持ち出し袋のチェックで着火剤を持っている子どもがいて、それを利用することになった。それでもあわてるあまりに早く燃やそうとうちわで仰ぐ子どもすらいた。たき木は事前に保護者からいただいていたものであ



ったが、災害時にはそのような配慮はない。切り出しで残った竹や 辺りを探してかき集めてこなくてはならないという作業もある。

あまりの炎の強さに、「ご飯が炊ける前に竹が焼けてしまうのではないだろうか。」と不安になる声もありながらその様子を見守った。ふたを開けのぞいても水が入った状態が続いた。炊飯器では炊ける頃になると蒸気が上がってくるはずだが、竹の底が黒くなっていくばかりで一層不安を募らせた。途中で1つの竹は節に穴が開き、空気が漏れていることに気づいた。あわてて捨ててあったカップうどんのふたで穴をふさぐというハプニングにも見舞わ



れた。また水の分量が分からなかったこともあり、途中で沸かしたお湯を注ぐこともした。水よりもお湯を入れて炊く方が効率がよいのではないかという意見も出た。全員が初体験であり、活動の一つ一つに新しい発見や疑問が生まれることで、子どもたちに考える力がついてきていた。

どうもハプニングでふさいだ竹の飯ごうが空気の通りが一番よかったようで蒸気が出てきた。不安が一瞬にして「ほっと」した表情に変わった。その後次々と蒸気が噴き出し、炊飯器で炊くご飯と同じようなご飯が炊けてきた。慎重に竹の飯ごうをおろした。最初に不安にさせた竹の底は思った以上に燃えていなく、竹でご飯が炊けることを立証した。

ここまで2時間以上の時間を費やしたが、この活動は、今後災害に見舞われたとき十分に役立つものであったと考える。万一被災状況にあったときには率先して活動の中心となってほしいと願いながら、無事ご飯が食べられる喜びを子どもたちと味わった。炊きあがったご飯と即席のみそ汁でたどりついた食事は満腹感を得られるものとなった。空腹でいつもよりご飯がおいしく感じられたという子どもの感想がたくさんあった。

〈一泊シミュレーションをして〉

ふれあい学園

10月20日～21日

地震避難訓練一泊シミュレーションをして (作文)

名 前

私にとって20日と21日のシミュレーションは心に残るものでした。

かまどを作るときは、焼きいもをついた時と違って、工夫をしなければいけませんでした。なべをのせるものは火通が見つてくると、ちゃんと見にはかまど口のようにでした。

平岡さんの話で勉強できたことは、地味人の間のことです。約百年単位で大きな地震がくるなんて、まったく知らなかったのでも勉強できました。

この2日間で、一番くろうしたのは、火をぶつけて朝ご飯をたことろです。理科の授業で酸素とかが役に立てませんでした。火がなかなかつかないからです。

ふり返、みてたくさん失敗したので、この失敗の数々を、もと工夫したり見直し、本当の地味人のときに生かしたいです。

ふれあい学園

10月20日～21日

地震避難訓練一泊シミュレーションをして (作文)

名 前

ぼくは、一泊シミュレーションをして、初めて来たところ、わたしの印象に残っています。1つに書いていたのは、四、五人で、十数個の竹を割りました。竹を左手に持ちおさえ、もう一方の竹のような物の背面の方で、左手の竹をたたき割りました。はじめは竹の、ぎこちない音で、必死になり、夢中になって、全部、割ることができました。

次の日の朝は、昨日より大変でした。米をといじりに入れたのですが、簡単にはまりませんでした。大人の人に、手伝ってもらいましたが、みんな米をいじり、竹に刺さりました。シミュレーションの前にも、もっとお米の量や水の量を覚えていたらよかったと思いました。覚えていたらもっと早くご飯がたいていたかもしれません。これだから、地味人がおきたら、ダメだと思いました。これから、もっと勉強したり反省して、南海大地震に備えたいです。

⑥市民安全局見学

平岡さんからアドバイスいただき、市では、常に賞味期限を確認しながら災害時に備えて備蓄していることを教えていただいた。そこで一泊シミュレーションでは、備蓄品である非常用のかんばんとペットボトルの水を市民安全局から分けていただいた。

市民安全局の豊田局長さんから、市民安全局が果たす役割を聞いたり、災害が起きたときの緊急放送室や災害時救済対応機を見学した。放送室は市長室のすぐ隣に置かれていた。それは、もし災害が起きたとき、どのような対応をとるか情報を流すとき、市長が判断して市民に迅速に伝えるために市長室の側にあるということであった。予想外の所に放送室があり少し驚いたが、市民の安全を考えている行政の姿勢が見られた。

また、市役所の玄関先置かれた自動販売機は災害時には災害時救済対応機として無料になり、市民に支給される仕組みになっているということである。それだけでなく状況を的確に伝えられるようにテロップを流すよう工夫もしてあった。今後この販売機は市内の主要な場所に設置していくということだった。行政では「わが家の防災マニュアル」の配布や広報誌でも防災意識を高めてもらう努力をしたり、「ハザードマップ」づくりにも取り組んでいることを教えていただいた。



(3)「甘枝から発信」～わたしたちからみなさんへ～

⑦パンフレット作り

地震避難一泊シミュレーションをもとに、パンフレット作りをして地域への発信を考えた。自分たちの体験したことをパンフレットにして伝えることで、子どもたちなりに地震が起きたときの心得を発信したいと考えた。行政や大人の見方だけでなく、子どもの視線にたった防災意識が少しでも地域に貢献できればよいと思っている。



⑧隣町、由岐町の防災見学

これまでは自分たちの体験が、自分たちにとって今後の生きる力になるものとして取り組んできた。しかし、同じように防災に取り組んでいる近隣の町「由岐町」を見学させていただくことにより、さらに何かお互いに協力できることはないだろうか考えた。

由岐町は地震が起きたときには同時に津波が起こるであろうと防災に取り組んでいる町である。車で20分ぐらいの近い距離でありながら、地震が起きたときの状況が違うことがわかった。

由岐町役場の浜さんの案内で、町内を歩いて見て回った。住民の方のご協力で、自主防災組織が整備した津波避難場所の山や1361年に起きた正平の南海地震の碑の説明をしていただいた。

次に、町内のいろいろな場所にある津波避難階段や二次避難場所や備蓄用防災倉庫を見せていただいた。津波に対しての対策を行政と地域住民が協力して取り組んでいて、災害時には自分たちで守っていこうと考えていることがわかった。私たちの地域でももっと住民が防災意識を高めていかなければならないように思った。

その後、ワークショップでは、「由岐町のよいところ」「由岐町のよくないところ」「私たちが由岐町の人にできること」について考えた。今までは、自分たちのことしか考えられなかったが、他の地域を見て回り、自分たちの防災意識を高めるだけでなく、他の町の救済や



支援も考えられるようになればと思った。

5 研究の成果と今後の課題

徳島県立防災センターの見学や阿南消防組合の方のお話などから、献身的に防災に携わっている様子を学んだ。今まで防災に対する意識がなかった自分たちではあるが、必ず起こるであろう「南海地震」を現実的なものとして受けとめることができた。

自分たちが行ったシミュレーション体験は、予想した以上にスムーズにはかどった。不安の中で取り組んだ活動であったために、やり遂げたことが十分に子どもたちに成就感を与えた。しかし、まとめ活動の中で、活動を通して一人の力では何もできないことを反省する子どもが多かった。竹の切り出しや竹の飯ごうでのご飯炊きなど、至るところで地域の方や保護者の支援を受けた。今回は専門機関や専門家との連携をとらない計画で、自分たちだけでどこまでできるかが目的の一つでもあったため、これらのことから日頃からのコミュニケーションの大切さや困ったときこそ助け合って生きていくことの必要性を学ぶことができた。

どの活動も手探り状態ではあったが、活動をする度に防災意識が高まり、テレビで地震情報が流れると自分たちの問題として話題に上がるようになってきた。また活動を側面的に見ている下学年の子どもも関心をもったり、家庭への浸透力も高くなり家族で防災についての話や対策を考えて実践するようになってきた。

その一方で、経験が少ない子どもの実態も暴露した。事前に立てた計画や指示されたことはできても、予期しないことが起きると判断できずに活動が中断してしまうことである。被災時の瞬間的な判断力は命に関わることである。そのためにも、これらの活動が学習の一端だけで終わることなく、これからの生活の中で生きる力の一つになっていくように継続していきたい。そして、生まれ育った大切な町を守るために活動できる人に成長するように支援していきたい。

6 おわりに

テーマ「I Love 甘枝」～私たちの手で守る～とは、ふるさとを大切に思う子どもに育ってほしいという願いのもとで進めてきたものである。その中で必ず起こるといわれている「南海地震」を考えたとき、今から防災意識をしっかりと育てるで、自分の命は自分で守る力が身につくと考え、防災教育に取り組んできた。また、人として小さなボランティアができる人間づくりを継続していきたいと考えている。

